

川口幸大・堀江未央編著

中国の国内移動

——内なる他者との邂逅

京都大学学術出版会／2020年12月／319頁／3600円＋税



櫻井 想

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界規模で拡大し、物理的な人の移動に大きな制限が加えられ、世界は一変した（ように思われる）。それは現代においてグローバル化と人の移動が常態化していることの現れでもあった。事実、世界全体の国際移民は二〇一九年に二億二七〇〇万人を数えていた。しかし、一方で中国国内の流動人口に目を転じると、それを上回る二億四四〇〇万人（二〇一八年に発表の統計）もの人々が移動しているという（三頁）。この膨大な流動人口は中国の政治経済に大きな影響を与えている。「世界の工場」と称される輸出産業の発展は、安価な労働力である出稼ぎによって担われていた。一方、政府は穀物の供給確保のため、農民を農村と農業に固定する戸籍制度を設け、自由な移動に制限を設けている。国内移動は中国政府にとって極めて重要なイシューなのだ。

編者によると、国内移動をめぐる従来の研究は四つの傾向に分けられる。すなわち、「人口移動に関わる中国全体の政

策や法制度、社会構造を論じたもの」、「社会問題として地元民と出稼ぎ民との非対称性や没交渉を論じたもの」、「出稼ぎ者個々に注目し、出稼ぎ先でのサブイバルの状況やそこで形成されるアイデンティティにフォーカスしたもの」、「出稼ぎ者の出身地に残された高齢者や「留守児童」のケアの問題」である（九一―一〇頁）。しかし、従来の研究はしばしば移動がもたらす右記の事態を既存の状態からの「変化」と捉え、アプリアオリに「社会問題」として取り扱ってきたという。このような問題をふまえ、本書は「時間軸を現代に置きつつも、中国において移動が常態であったという視点を手放すことなく、中国という場に住まいフィールドワークを行なってきた者の目」から国内の移動を「変化のなかにある／と共にある日常」として描きだすことを目指す（二〇頁）。そして、「まさに動いている人々／動いた経験を持つ人々、彼／彼女らが持ち込んだ／持ち帰ったこと（知識、食、ファッション等々）、およびその出身コミュニティ

の家族や友人知人、移住先コミュニティの住民ら、といった、主としてそこに関わる人々とものごとに着目し、移動が中国社会に何をもたらしたか、ひいてはそこから我々は何を学ぶことができるかを検討しようとする民族誌的研究(三―四頁)として本書を位置付ける。

本書は、三部、八章(前後に序・終章が付される)から構成される。各章の執筆者たちは社会・文化人類学(以下、人類学と略記)を主たる専攻とし、研究対象やテーマ・焦点に差異はあるものの、人々の移動に影響を与える政府の政策といったマクロな視点を保持しつつ、各々のフィールドで生起している微細な変化、事柄を詳述している点で一貫している。以下、各章の内容について簡潔に紹介したい。

第一章「あなたがおれの百度だ——珠江デルタの「本地人」と「外地人」(川口幸大)では、中国南部の広東省広州市の事例から、「本地人」(地元の人々)と「外地人」(外地からやってきた人々)との交わりの特質が論じられる。一九八〇

年代以降、言語・職種・食などの習慣を異にする内陸部からの出稼ぎ(Ⅱ「外地人」)が多くやって来たことにより、両者の間で摩擦や緊張関係が生じていることが従来の研究において指摘されてきた。しかし、近年若い世代を中心にこの状況は変化しているという。広東語を話し甘口の広東料理を食べてきた本地人の暮らしに、普通語や辛い湖南・四川料理が確実に浸透しており、過度に親密ではないものの、他者との付き合いにおいて差異が必ずしも障壁とはならない状況が生じている。例えば、ある本地人が経営するくじ店の客は外地人が九割を占め、常連客との間では普通語を用いた冗談交じりのやりとりが日々展開されている様子などが描かれる。本章は、「本地人」／「外地人」というカテゴリーが決して固定的なものではなく、歴史的に動態的であり、常に対立するものではないことを我々に教えてくれる。

第二章「都市を出る人、都市に来る人・戻る人——広東省の地方都市汕尾の事例から」(稲澤努)においても、前章

同様、本地人と外地人との関係性の変化が論じられる。しかし、汕尾が広州ほど経済的に豊かではない地方都市である点に前章との違いがある。歴史的に汕尾から香港へと多くの人々が渡っており、香港人となった二世たちが、改革開放後、故郷に投資や寄付をおこなうなど、香港との結びつきがみられる。しかし、この頃から、香港への移住に制限が加えられ、大陸も経済発展を遂げたことから、広州や深圳へ出稼ぎに行く者が増加した。一方で、周辺の農村や四川省などの内陸から汕尾へと流入する人の流れも存在する。そのため、本地人の中には、広東語を話す裕福な香港人／福建語圏に属する福佬話(汕尾語)を話す貧しい自分たち／より貧しく遅れた普通語を話す外地人、という認識が存在し、外地人に対して従来根強い差別が存在した。しかし、頻繁にレストランに飲茶に集う汕尾の人々が、そこで日常的に接する四川人のウェイターのために利益目的無しで商品の代行購入を引き受けたり、市内パスの運転手を務める外地人が汕尾語で目的

地を告げる本地人に対して普通語で話すよう要求したりするなど変化が生じているという。

第三章「出稼ぎ先は「小さな国連」

——浙江省義烏市に暮らすムスリムたち（奈良雅史）は、改革開放後、「小商品の街」ともよばれ国際商業都市へと発展を遂げた浙江省義烏市に出稼ぎに来たムスリムを事例に、彼／彼女らの義烏への移動とそこで暮らす意味が論じられる。義烏に集まる商人の中でも中東アラブ諸国の商人が特に多く、中国国内のムスリムの人々は、彼／彼女らの通訳やビジネスチャンスを求めて義烏にやって来る。従来の研究が中国ムスリムの移動を経済的に動機づけられたものとして捉えてきた点に筆者は疑問を投げかける。何故ならば、二〇〇八年のリーマン・ショック以降、義烏はかつてほど経済的利益を得られる場ではなくなっているからだ。では何故、それでも彼／彼女らは義烏へやって来る、あるいは義烏にとどまるのか、と筆者は問う。そして、その理由を都市としての義烏の規模とコスモ

ポリタンな性格に見出す。義烏は、国際的な貿易都市である広州などの大都市に比べると経済規模では劣るものの、生活リズムが速すぎて空も見えない広州に対し、環境も良く住みやすいほどほどの都市である。かつ、ムスリムのあいだには一定の匿名性が保たれており、親族関係のような互恵的社会関係を維持するうえで不可避な負担やしがらみから解放されているため、比較的自由に暮らせるという。

第四章「移動の危険に対処する呪術

——雲南ラフの男たちと出稼ぎ」（堀江未央）は、東南アジア諸国との国境に程近い雲南省西南部の山地民ラフの出稼ぎを取り上げる。歴史的にラフは焼畑経営や動乱からの逃避のために国境を越えて「下のくに」（ビルマ）へ移動を繰り返してきた。しかし、近年は「上のくに」（雲南省の西双版纳タイ族自治州や広東、北京、上海、広西、浙江など）へ行くことが増えている。このような近年の出稼ぎは、金銭的な収入以上に、未婚の若い男性が外の世界へ出るという経験

自体により重要な意味があるという。

その経験の一つとして、筆者は、出稼ぎ先で異民族の「ダオス」に金銭を支払うことで習い身に付ける呪術、「口功（koukou）」に着目する。これは、「他者から危害を加えられた際の防御の呪術としての性格を持つて」おり（二四六頁）、従来災いが起きた時に村内の呪医がおこなう「グ」という呪術の実践とは異なる性格を有する一方、ラフが長らく有してきた観念である安全な村落と危険な外界という空間的な二分法との連続性もみられる。出稼ぎから戻った若者による「口功」の語りは、出稼ぎ経験のない若い小中学生男子の外の世界への関心を惹きつけるものでもあるという。

第五章「移動が生み出すトランス・エスニックな子ども服——雲南省から貴州省へ流通するモン／ミャオ族衣装と民間関係」（宮脇千絵）では、雲南省のモン（ミャオ族の自称集団）の衣装およびトランス・エスニックな子ども服に焦点が当てられ、近年の人の移動やインターネットの普及に伴う衣装の流通が民族間

の差異化や溶解をもたらしていることが論じられる。まず、モンの移動とエスニシテイ、および子ども服に関する論点の整理がなされたうえで、モンの「民族衣装」が既製服化している現状が論じられる。既製服化したモンの「民族衣装」が二〇一〇年以降、インターネットを介し国内各地に流通するようになる。生産者と消費者の関係性は希薄であるものの、生産地である雲南省から距離を隔てた貴州省における消費の動向から、モンの「民族衣装」がアイデンティティの共有やエスニシテイの差異化としての機能を担っている、という点が指摘される。また、一方でこの傾向が当てはまらないトランス・エスニックな子ども服が近年登場しており、むしろ子ども服においては民族間の境界が無化されるような新しい価値観が共有されつつあるという。

第六章 「出稼ぎに行くのは甲斐性のない人——モンゴル人の移動と生活基盤」(包双月)では、内モンゴル自治区の東部地域で農耕・定住生活を送るモンゴル人の近年の出稼ぎ現象を取り上げ、彼／

彼女らの出稼ぎに対する認識が論じられる。まず、中国における移動の歴史が確認される。遊牧民であったモンゴル人が当地域で農耕・定住を開始したのも、降水量などの自然環境要因に加え、漢人の移住の影響が大きかったとされる。このような背景をふまえたうえで、当地域の生業をめぐる状況が描かれる。当地域の生業は、農牧の相互依存関係によって成り立っているが、その基盤である土地は使用権の分配に関する政策に大きく影響される。そのため、改革開放後、モンゴル人に比べると農地が少ない漢人は、モンゴル人に比べ出稼ぎへ行く者が多かった。しかし、近年重要な換金作物となったヒマワリの栽培に失敗し、借金を抱え、家畜を売り払い、農地も貸し出し、出稼ぎに出るモンゴル人が増加している。そのため、出稼ぎに行く人に対するモンゴル人のイメージは、生活基盤である土地(「ソーリ」)を持たない人、というネガティブなものであり、故郷で土地や家畜を有し「ソーリ」のある安定した生活に高い価値がおかれる。

第七章 「君たちは何をしている人なのか？」——広西三江県におけるマカイ人の定住と地域社会(黄潔)では、広西三江県を舞台に、少数民族から「マカイ」とよばれる人々(自称客家人、戸籍・身分証上は漢族)の定住過程、彼／彼女らが地域社会に与えた影響が論じられる。三江県は、広西チワン族自治区、貴州省、湖南省の境界に位置し、山が延々と続き、河川を用いた流通が歴史的に重要な役割を果たしてきた。中でも、明代中期から近代に至るまで木材産業が、当地の主要産業であった。マカイ人は、この木材交易をおこなうために明末清初から民国期にかけて福建・広東省から移住してきた客家である。三江県富禄地方の川辺に住んでいたミャオの土地を客家が奪い、そこで客家が木材業をはじめ、ミャオは岑牙と呼ばれる坂に移住した。客家の商売が盛んになると、山の中腹に暮らすトン族が川辺の付近に移住し、山の木材を運び出す人足として働き始めた。しかし、彼らが不在の間にその土地はミャオ族に占有された。複雑な過程に

より互いへの偏見も存在したが、やがてトンやミヤオと通婚するマカイもあらわれた。その結果、客家が持ち込んだ媽祖信仰と花砲節（媽祖誕に関連する廟会）は、当地域と周辺地域の多民族が共に関わる地域共有の信仰と祭礼となり、二〇〇八年にはトン族の伝統的節日として広西チワン族自治区の非物質文化遺産リストに登録されるに至る。

第八章「移りゆく「辺境」イメージ——上海から雲南への「支辺」移民の語りを通して」（孫潔）では、一九五〇年代から六〇年代中頃にかけて、政府による辺境支援の呼びかけに応じて上海から雲南へ移住した「支辺移民」とよばれる人々が語るライフストーリーから、異なる時代における「辺境」のイメージの多様性があきらかにされる。「支辺」の歴史の概要が説明されたうえで、支辺移民の構成が文化大革命期（一九六六～一九七六年）に農村へと下放された知識青年と対比的に述べられる。そして、四名のライフストーリーにもとづき、移住当初（一九五〇～六〇年代中期）、一九七九年

末の知識青年の故郷帰還以後から一九八〇年代、そして上海の浦東新区が開発された一九九〇年代以降の三つの時期の差異が考察される。一つ目の時期は生存と出世を求める居場所としての「辺境」が位置付けられ、二つ目の時期は政策により定着させられ脱出できない「辺境」として語られ、最後は停滞したままの「辺境」というイメージが語られる。様々な「辺境」イメージは、「辺境（辺疆）」をめぐる地理的、政治的、軍事的な概念と、彼らの置かれたその時々为社会状況及び彼らの生活環境、そして「故郷」の位置付けに合わせて思い描かれている（二九二頁）のであった。

以上、各章の内容について紹介をおこなった。ここから評者の視点から本書の意義について手短かに論じたい。評者は、中国北部の都市天津市の路上古物市場について人類学における空間論の視点から研究をおこなってきた。評者の経験に照らしても、本書第一章で論じられたような本地人と外地人との関係性は大きいに共感できるものであった。評者が調査した

古物市場の売り手には国营企業改革で失業（あるいは早期退職）を余儀なくされた本地人が多い。一方で、古物市場の恒常的な買い手に外地人の存在がみられた。彼／彼女らは古着・携帯電話・価値ある古物などを専門に買い入れ、市内の異なる市場やネット上、アフリカといった多様な先々へ転売をおこない生計を立てていた。この古物市場においても売り手と買い手の関係性は相互に排他的でもなく過度に親密でもなかった。おそらく、現在の中国国内においてこのような本地人と外地人の関係性は一定程度の普遍性を有しており、これまで両者の対立性に焦点が当てられがちであった先行研究を問い直すうえで本書は重要な貢献を果たしているだろう。加えて、出稼ぎ先のみならず多様な送り出し側の実態をあきらかにしている点でも本書は高い民族誌的価値を有するといえよう。

国際的な人の移動を扱う諸研究に対して本書がどのような意義を有するのか、という問題についてそこまで立ち入った言及がなされていない点だが、評者に

とって少し残念に思えた。というのも、近年人類学のみならず社会学や地理学など幅広い領域において「移動と場所」というトピックの重要性が増しており、本書はその点でも重要な貢献を果たすことができるという点では感じられたからである。従来「場所」は、ローカルで閉じられた領域と考えられ、グローバル化に伴って消滅あるいは掘り崩されてしまうもの、もしくは逆にグローバル化への抵抗の拠点として論じられる傾向にあったが、近年このような排他性を有する「場所」理解の再考が主張されている。そのうえで、「フロー」のもたらす複数的な社会関係に開かれながら、同時に自己の独自性を主張しうる拠点を「つくりあげ、しかもそれが排他的な閉鎖性に陥らないよう、つねに動的なダイナミズムを維持しつづけることで、ようやく確保しうるような場」〔近森 2012: 132〕の模索がなされている状況にあるが、これまで社会学や地理学における「場所」の議論は、しばしば理念的・抽象的な議論にとどまることが多かった。評者には、本書がコン

タクト・ゾーンという概念を用いてこれに類する議論を展開していたように思えた。マクロな政治経済構造に目配りしつつ、フィールドで生起する日常のさまざまな営みを記述する民族誌的研究は、現在人文社会科学で求められている「移動と場所」の問題に貢献できる余地を多く残している。加えて、第一、二、七章などの論文であきらかにされているように、中国というフィールドは多様な人々・民族が複雑に絡み合ってきた「歴史」をある程度実証的に描くことができるという強みを持っている。このような点をふまえ、中国国内における人の移動を多様な観点から扱った本書に学ぶ点は非常に多く、中国を研究対象とする人だけでなく、移動や場所の問題を考える研究者にとっても有益な本といえよう。また、平易な文章で書かれていることから、現代中国に関心をもつ一般の読者にとっても興味深い本となるであろう。

参考文献

- 近森高明 2012 「書評・吉原直樹著『モビリティと場所——二世紀都市空間の転回』東京大学出版会、二〇〇八年」
『三田社会学会』第一七号、一二八一—三二頁